
エドワード M. ガローデット (1837-1917) の聾啞者観

上 野 益 雄

1. はじめに

1988年3月アメリカのワシントンD.Cにあるガローデット大学のキャンパスでは、かつての公民権運動のときのデモを思わせるような抗議運動が起こった。聾啞者の大学として歴史のある、この大学の第7代学長として、聴者ではなく聾者の学長を要求するデモであった。聾者の人権を主張し、手話復権をより強く印象づけるものであった。日本でもニュースで取り上げていたので覚えている人もいると思う。

ガローデット大学は、アメリカばかりでなく世界中の聾啞者のメッカとして外国からの留学生も多く、聾啞者の文化の中心として130年の間、指導的な役割を果たしてきた。1864年に設立されたこの大学の初代学長が、エドワード M. ガローデット (Edward M. Gallaudet, 1837-1917) である。

彼の父親トーマス H. ガローデット (Thomas H. Gallaudet, 1787-1851) は、アメリカで最初の公的な聾啞施設長として、歴史上その榮譽を担っている。母親は生まれつきの聾啞者であり、19歳でこの聾啞施設に最初に登録された生徒であり、4年後にトーマスと結婚したソフィアである。この両親の8番目の末息子がエドワードである。

彼は歴史上、聾啞者の教育方法として併用法を提唱したことで知られている。併用法とは、簡単に言えば手話と発音の指導とを併用していくという考え方のことである。聾啞史上、手話と口話のそれぞれの主張者は、鋭く対立していた。それは単に言語の指導面のことではなく、言語観、聾啞者観を異にしていた。

ではエドワードの提唱した併用法は何か。いいかえれば、併用法の意味するものは何であるのか。それは口話法に一步近づいたものであるのか、あるいは手話法の理念を残したものであって、口話法とは依然対立するものであるのか。E. M. ガローデットの提案は、口話法の立場からみると、何とも不徹底なものであり、手話法の立場からみると、口話法に傾いたものと映った。事実、彼は、「父であるT. H. ガローデットの意図を受け継がず、アメリカの聾教育の伝統をないがしろにした」という非難を受けているのである⁽¹⁾。歴史的に、口話法と手話法の教育理念は対立していた。併用法という用語で、アメリカで初めてその考えを公表したE. M. ガローデットの理念は、本当のところどういうことであったのか。彼のいう併用法に内在する聾啞者観を、明らかにすることが本稿の目的である。(歴史的な研究であるので、本論文では、聴覚障害という用語でなく聾啞という用語を用

いる。)

2. 聾唖施設の状況

E. M. ガローデットのヨーロッパ視察が1867年である。父親T. H. ガローデットが初めて聾唖教育を始めた1817年から⁽²⁾、およそ50年近くが経ったことになる。この間に州立の聾唖施設が23設立されているが、それらの施設では、もっぱら手話が用いられていた。

1860年代に入り、口話法による聾唖施設の設立運動が起こった。S. G. ハウ (S. G. Howe 1801-1876)らのマサチューセッツ慈善委員会では、聾唖施設の手話を批判し、口話法推進の活動を推し進めた。また1867年7月には、後に口話法の指導的な役割を果たすことになるクラーク聾唖院 (Clarke Institution for the Deaf-Mutes)⁽³⁾が認可された。この手話を廃して発音指導を主とするクラーク聾唖院の設立は、従来の州立聾唖施設の側に少なからぬ関心を引き起こした⁽⁴⁾。それより4カ月前の3月には B.インゲルスマン (Bernhard Ingelsmann) によって口話法の施設 (New York Institution for the Improved Instruction of Deaf-Mutes)⁽⁵⁾もニューヨークに設立されていた。

E. M. ガローデットは、コロンビア聾唖院の理事会から派遣され、1867年5月から6箇月にわたってヨーロッパの聾学校の視察を行った。帰国後、同年10月、彼は直ちに理事会に報告書を提出し、翌年1868年5月には、第1回の全国聾唖施設長会議 (The National Conference of Principals of Institutions for the Deaf and Dumb, 間もなく施設という名称は学校となり、この会議も全国聾学校校長会となる) を召集した。そこでは、発音法を取り入れた併用法が提唱された。

クラーク聾唖院で始められた口話法は、進歩的な知識人たちを後ろ盾とし、やがて社会のコンセンサスを得ようとする流れとなっていく。その後のアメリカの聾教育は、都市を中心に通学制の聾学校が増え、口話法が拡大に向かうのである。

一方、手話法を中心としていた従来の州立聾唖施設は、1868年以降、19世紀を通して口話法の影響を受けながら、併用法へ進むことになる。それはやがて、口話法との論争の中で、徐々に指導法の主役の座を口話法に明け渡すことになるのである。

3. 社会的背景

(1) 農業国から工業国へ

19世紀初頭よりアメリカの資本主義は、イギリスの重商主義の制約から解放されて発展の一途をたどることになる。人口は増え続け外国よりの移民の増大⁽⁶⁾によって新しい問題が生じ、イギリスにおけると同様にさまざまな社会悪が都市に生じた。農業とマニユーフアクチュアの国から、大工業生産国へと進んでいくなかで、賃金労働者の都市への流入、スラム街の出現、女子・少年労働者などの問題が生じた。19世紀前半は、実に産業資本が増大する過程で、貧困者もまた増大する時期でもあった。1821年マサチューセッツ州議会の諮問による同州救貧法に関する委員会報告 “Queency Report” が出され、1824年には、ニューヨーク立法機関の委嘱による、救貧法の経費と

運営に関する報告書 “Yates Report” が出された。救貧院は一般的には、未分化のままであり、そこには雑多な貧民が、病気であれ健康であれ、一緒くたになって収容されていた。⁽⁷⁾

また、19世紀はアメリカがヨーロッパの伝統を受け継ぎながら、アメリカ独自の文化を作り上げる時期であった。社会発展の時代として特徴づけられ、交通・産業の発展、教育・文化の将来への希望に膨らんだ時代がすでに始まっていた。たとえば、1802年T. H. ガローデットがエール大学の入学試験に向かう時には、馬車であったのが、1844年にはボストン-アルバニー間とともにハートフォード-ニューヨーク間の鉄道が開通している。末息子E. M. ガローデットが正式に聾啞教育の教師になったのが1857年であり、社会の変化につれて聾教育も変わろうとしていた⁽⁸⁾。すでに1830年代よりマサチューセッツ州を中心にコモン・スクール設立の運動が始まっており、幾多の反対に会いながらも初等教育の普及を目指すこの運動は、徐々に一般に受け入れられ着々と広まっていった。宗教的にはオーソドックスなピューリタンの信仰の時代からハーバード大学を中心としてユニテリアンの信仰が益々優勢となり、理性的な信仰の時代へ入っていった。このことは、科学技術の発展の促進、非宗派性の主張、宗教教育の軽視へとつながっていった。カルヴィニズムの厳格な“予定説”と原罪の信仰を放棄して、個人的・人格的宗教に移行し、人間の人格に対する深い尊敬を抱くユニテリアニズムは「怒り嫉妬する復讐的・独裁的神から、恩情ある慈悲深い神に移った。・・・各人は聖書と自己自身を守ることによって、自己の救済の成就できる世界に移った。それは啓蒙時代の楽観的信条と将来に期待する社会的諸理想とを社会の改善に捧げるキリスト教のリベラルな信条に関連づけられた。このようにして、ユニテリアニズムは、公立学校設置運動もその一部である19世紀初期の社会改革運動を促進するのに貢献した」⁽⁹⁾。当然、聾啞教育はこれらの動きに影響され、またそれらの動きの一つを形づくっていった。

産業革命の影響によって人口の都市への集中化、貧困者の増大などの社会矛盾が顕在化するとともに、さまざまな発明・発見が人類の将来にばら色の期待を与える時代でもあった。知識と技術が増すことによって、人間の福祉と幸福が実現されるべき時代でもあった。南北戦争をはさんで東部の工業化は以前に比べ著しい発展を示し、やがて農業国から工業国への移行する出発の時期でもあった。一方、徐々にデモクラシーの思想が各地に生じ、新聞、雑誌などの出版が活発になり、経済・政治・科学・宗教・社会などの人間的関心のあらゆるテーマを扱った論説が出され、より安価な印刷物の発明により、大衆読者層を保とうとしていった。

4. 初等教育の起こり

デモクラシーの波が前進するに従って、他の教育のない国民子弟のために、税金によって維持される無月謝学校を設立すべきであるという考えが次第に根を張ってきた⁽¹⁰⁾。

ホレース・マン (Horace Mann, 1796-1859) やヘンリー・バーナード (Henry Bernard, 1811-1900) の活躍する時期は以上のような状況であった。それはやがて来る新しい発展の時代の前触れの時代でもあった。教育に対する啓蒙が始まり、資本主義の発展につれて民衆の知識を求める気運が高まり、新しい発展の時期がくる前夜ではあったが、まだまだ一般庶民の初等教育は貧弱なもの

であり、学校は無用な時代であった。1860年代の南北戦争以降の工業化と移民による人口増加、都市への人口集中、交通・出版の発達等、よい意味であれ悪い意味であれ、そうした社会の発展は、教育の面においてもその影響を与えずにはおかなかった。公立無月謝制初等学校（common school）の運動は、さまざまな困難に会いながらも、徐々に進んでいった。1852年には、「8歳から12歳までの児童の保護者はすべて少なくとも、年12週はその児童を学校に就学させねばならない」という法律ができ、1851年の就学率51%、1861年には63%となった⁽¹¹⁾。聾啞教育においては、1842年のホレース・マンのヨーロッパの聾教育の発音指導を取り入れるよう勧告した「第7年報」がだされている。さらに、マンと同行したサムエル・グリッドリ・ハウ（Samuel G. Howe, 1801-1876）は口話法の聾啞学校の設立をマサチューセッツ州に対して請願している。ハートフォード聾啞院、ニューヨーク聾啞院の院長たちは、これらの動きを受けてヨーロッパの視察を行っている。1847年には、ハートフォード聾啞院より聾啞教育の専門機関誌である“American Annals”誌が発行された。この創刊号の序には「印刷が進歩し、情報が多くなった現在、人々の異なった考えかたのあることを理解し、意見の公表・交換が必要であり、聾教育のより良い発展と生徒の指導のためにこの専門誌が発刊された」と述べられている。

1868年には第1回施設長会議におけるE. M. ガローデットの主張は、従来の聾教育の線から出たものであり、しかもその従来の伝統的な考えかたに捕らわれない新しい脱皮をめざしていた。このように、1860年代後半の口話法による学校の設立、従来の施設側の併用法という指導法の起こり、こういった変化は、社会の発展とともに、一般の初等教育が進展し、整備されるにつれて、聾教育も施設の時代から学校へ組み込まれていく時代を表すものであった。

すでに1840年代W.E.チャニング（W. E. Channing）は古い宗教でなく新しい人道主義と社会改革をめざす宗教を叫び、口話法を推奨したホレース・マンはアメリカの文明を蝕む文盲をなくし民衆が知識と技術をもつことが社会の改善に役立つことを説いた⁽¹²⁾。H.マンとともにヨーロッパを視察したS. G. ハウは、手話法を厳しく批判し口話法の施設の設立運動をバックアップした。口話法による施設の設立運動を進めたG. G. ハバード（G. G. Hubbard 1822-1897）やF. B. サンボーン（F. B. Sanborn）らは、すべてR. W. エマーソン（R. W. Emerson）を中心とするコンコード・グループのメンバーたちであった。それに対して従来の施設の教師たちはオーソドックスな会衆派や長老派に属するピューリタンたちであり、あまりにも保守的であった。

しかし、これら聾啞施設の教師たちの間にも、手話体制の中でさまざまな意見が出され必ずしも教育方法に関して一致した意見ではなかった。まさに変化する時代の前夜であった。しかし聾啞教育における手話の位置づけをめぐる討論の中で、施設の指導者のおおかたの意見は、発音指導の実際の可能性については否定的であった。目標は書記言語の習得であった。しかし、その成果はあがらず、英語を使用できるものはごく僅かであったことは、教師たちの悩みでもあった。聾啞教育の進展へと向かう時期に、言語の指導実績をあげたいという願いが教師たちにあった。特に聾啞大学の学長として聾啞者の高等教育の責任を持つE. M. ガローデットは、このことを痛切に感じていた。若い彼は、時代の空気を感じており、聾啞教育も新しく変わらねばならないという実感を持っていたのである。

5. ヨーロッパ視察

(1) ヨーロッパ視察

ところで、E. M. ガローデットの提唱した併用法はどのような内容であったかを、彼の1867年の報告書に簡単に要約をしてみると次の通りである。

E. M. ガローデットの報告書には、次のような勧告が第一にあげられている。

「人工的スピーチ (artificial speech) と読唇の指導が、一日も早く行われることが必要である。すなわち、初等課程のすべての生徒は、この指導が成功しそうにないことが明らかとなるまでは、この指導の機会が与えられること。口話の訓練 (oral exercise) に好ましい資質を示す生徒には、在籍中引き続きこのスピーチと読唇の指導がなされること」⁽¹³⁾

併用法は、その後実際には、教育現場の中でさまざまな形態をとることになるが、上記の勧告の形態がその本来のものである。

しかし、E. M. ガローデットの表現の意味はどういうことであろうか。「この提案は、口話法に譲歩し口話法に一步近づいたものではないか」「併用法の教育理念は、口話法のそれと内実同じであり、口話法の亜流ではないのか」といった問題である⁽¹⁴⁾。口話法は、言語指導の手段として、スピーチと読唇のみを認めたものであり、それ以外の手話・指文字は存在しない。理念上はそうであるが、それにもかかわらず、現実には口話法に失敗する聾児たちがおり、やむを得ない必要悪という形で、手話が消極的に黙認される場合があった。併用法は歴史上、そのようなあいまいなものとして残り、わが国でも使われるようになった。後の純粹口話法という立場からは、当然手話容認の不徹底なことが批判された。

時代の流れは従来の手話法の見直しが迫られる状況にあった。

E. M. ガローデットは当時のヨーロッパの聾啞施設を

- ① 手話・指文字の使用を主体とする施設
- ② 発音指導を主体とする施設
- ③ 手話・指文字の指導と発音指導を併用する施設

の3つに分けこのうち③のグループの施設に注目した。

この③のグループをさらに2つに分けて、

- a) 手話法の伝統に立ちながら発音指導を併用する施設
 - b) 発音指導の伝統に立ちながら手話・指文字を併用する施設
- とし、特にa)の施設を評価した。

彼は「発音指導の源となっている、ハイニッケの理論を基盤とする施設は一つもない」と見ており、今後の聾教育は併用法へ進むものと推測していた。彼の教育理念は、一見考えられるように、発音法の理念つまり口話法の理念というものに近づいたものではない。発音指導の導入を勧めた彼の指導法は、口話法に近づき口話法と同じように見えるが、その教育理念は、手話・指文字を聾教育において必要なものと認めた手話法の教育理念と同じものであり、手話による指導が悪く発音による指導でなくてはならないという発想はなかった。

従って彼の考え方は、口話法の理念とは全く異なった理念に立ったものであったと考えられる。

E. M. ガローデットは時代の流れを読み取っていた。ヨーロッパ視察より帰り、コロンビア聾唖施設の理事たちに報告書を提出した翌年1868年5月に、第1回の全国聾唖施設長会議を召集し、そこで彼の提案を発表した。

すでにアメリカの聾唖諸施設において指導法についてさまざまな意見が出されていたが、E.M.ガローデットの提案の背景にはどのような要因があったのか。彼の提案はどのように受け取られたか、その理念と方法の関係についてみることにする。彼がヨーロッパ視察を終えて、その報告書を提出したのが1867年10月23日である。

(2) 聾唖施設長会議

これまで、聾唖施設長会議でのE. M. ガローデットの「併用法の提案は、満場一致で採択された」といわれてきた。ところが、実際のところは、意見は分かれ、議論は紛糾した。これまでの伝統を重んずる先輩たちは、手話が軽んじられることに耐えられなかった。また新しく設立されたクラーク聾唖院を訪れ、聾唖者のスピーチ指導に時代の流れを感じていた若手たちは、併用法の提案を中途半端なものに感じた。

会議における意見は、三つのタイプに分けられる⁽¹⁵⁾。

①一つは古いこれまでの伝統を重んずる考え方である。

②もう一つは新しい教師たちに見られる、発音の指導を積極的に取り入れようとするタイプで時代の流れに沿った人々である。

③第3としてE. M. ガローデットの提案通り、これまでのものに基礎をおきながら改善をしようとするものである。

第3のタイプは聾唖施設の改革に際して、現実の実践から目を離さないで、しかも過去の面子にこだわらずに現状を変えて行くと言う点では筆者は評価している。(この問題は詳しくは、改めて取り上げるべきものである。)

しかし社会は②の新しい流れの考え方に進んでいた。聾唖者も社会の中で生活せねばならない、社会でのけ者になってはいけない。一家の団欒に、一般の人達との楽しい交わりに加わらねばいけない。何故その権利を聾唖者から取り上げるのか。そうしないために、発音の指導を聾唖教育において積極的に推し進めなければいけない。隔離の政策は間違いである。19世紀から20世紀に向けて、時代はこのような方向へ進んでいた。

それに反してこれまでの聾唖施設の教師たちは、社会での孤独な生活、のけ者であった生活は、手話による教師・仲間との交流、手話による心の糧によって回復されと考えていた。特に宗教の指導においては、手話は欠かせないものとしていた。社会との交流は書記言語によることを目指した。彼らは社会の人々が指文字・手話を学んでくれることを望んだ。彼らの中には手話と書記言語という二つの間に絶えず葛藤があったことも事実である。彼ら教育者たちは、発音の指導を取り入れても、手話は廃止すべきであるとは考えてはいなかったのである。

6. E. M. ガローデットの聾啞者観

(1) 「E. M. ガローデットの併用法」の教育理念

言語指導における方法上の論争は、形を変えながらも現在まで続いている。ここで取り扱う手話一発音法の論争の問題も、後のアメリカにおける手話一口話の問題、あるいは併用法一口話法の問題と同じく、単に方法という形態上の問題ではなかった。教育方法とその基盤としての教育理念とは不可分のものである。特に、聾教育史における教育方法の問題は、このことが鮮明に現れているのである。E. M. ガローデットもまさにこの現れた教育方法と、根底にある教育理念の関係について強い関心を寄せていた。

彼は、教育の基盤となる理念を基礎構造 (substructure) という用語で、それに基づいて表面に現れる指導のシステムを上部構造 (superstructure) という用語で説明している。

彼は、教育者個人が最も望ましい教育手段と考えるそれぞれの意見を持ち、それらが実際になされた仕事として、教育史の上に現れているとみており「それらの (引用者注; それぞれの聾教育者の意見の) 相異は、聾啞者の心理的状态についてどのように考えるかという、二つの相反する考え方 (opposite conception) にその起源を持つと思われる」⁽¹⁶⁾と述べている。この相反する考え方とは、ハイニッケ (S. Heinicke) とド・レペ (De l'Epee) の考え方のことをさしている。

E. M. ガローデットの解釈では、前者は「聾」を人間の異常な状態ととらえ、「聾」という事実に積極的な意味を持たせたいとする。つまり「聾」であることが、人を“怪奇なもの” (monstrosity) にさせる故に、聾であることを消し去るスピーチが、知性の発達にとって絶対的に不可欠なものになり、従って、教育の可能性はスピーチの獲得能力のいかにかわる。このことから必然的に、すべての努力はまず第一に、この異常な状態に向けられ、可能な限り「話す人間」という正常な状態にさせることに向けられることになる。

後者の立場は、聾啞者を正常な人間とみなし、「聾」という事実を異常なものとは見ていない。言い換えれば、他の人が持っているある種の能力には欠けるが、人間としては完全なものと考えられ、「聾」ということは、否定されてよいもの (negative) として受けとられる。音声で話すことができないということは、知的発達にとって何ら障壁とならず、従って、この教育思想によれば、「聾」という状態に合った教育手段を見つけることが必要であり、また可能であり、教師と生徒の共通に可能なコミュニケーションのチャンネルを作り上げることが教育の第一歩となる⁽¹⁷⁾。

E. M. ガローデットは、以上のように二つの立場の基礎構造を述べた後、さらにハイニッケとド・レペについて議論を進めている。要約すると以下のようなものである。

「人工的方法の創造者ハイニッケは、聾啞者を異常な状態と見た。文字言語は決して思考の手段にはならず、音声言語を知らなくては、聾啞児は書く機械以上の何物にもなれない。すなわち、心を通りすぎるイメージの連続以外には決してならない。従って、上部構造において用いられる手段は、音声言語以外の何物をもっても代えることはできない。土台から建物まで、スピーチ、スピーチであってそれ以外は有り得ないのである」⁽¹⁸⁾

「ド・レペは、自然的方法の父である。彼は、聾啞の状態を不自然なものとも奇怪なもの

(unnatural or monstrous)とも見ていない。「聾」ということに、知的発達にとっての障壁はないとみる。彼は、聾啞者をすでに言語を持っているものとみなす。不完全なことは事実であるが、教師によって完全なものにしようと考える。思考は、スピーチに存在するものではないし、生徒とのコミュニケーションの手段は、視覚による方法で確実になされる」⁽¹⁹⁾

もちろんE. M. ガローデットは、後者の立場を正しいとみており、手話法の教育理念つまり彼のいう基礎構造の上に、発音の指導という教育方法つまり、彼のいう上部構造をつけるよう勧告したと見ることができる。彼は、発音指導の実施を勧告する自分の意図を誤解されないために、その基盤となっている理念が何かをあえて次のようにつけ加えている。

「わがアメリカの学校で追及されている教育システムが基盤としているものについては、今回の視察において、何ら疑問を引き起こすものではない。我々の建物は、確実な思想の岩の上に建てられており、決して砂の上に建てられてはいないことは言うまでもない」⁽²⁰⁾

(2) E. M. ガローデットの発音法推進者に対する見解

さきに見たように、E. M. ガローデットは、聾教育方法における二つの考え方について、非常に明確にその根底にある思想について自分の解釈を与えその立場を明らかにした。それでは彼が視察をした当時のヨーロッパの教師たちについては、どのような印象を持っていたのであろうか。彼は、もともとハイニッケの思想を基盤としている学校は一つもない、と述べ、当時のヨーロッパの教師たちには厳密な発音主義者は殆どいないとみていた。事実多くの教師たちがまだ手話の必要性を認めていた。

E. M. ガローデットは、ドイツの教師たちの多くが、発音法によっては成功しない聾児のいることを認めているという事実からも、併用法がこれからの時代において広く受け入れられると見ていたにちがいない。ドイツの聾教員会議において、発音指導に成功しない生徒をどのように指導するか、という議題が取り上げられていた。彼は、現実に発音指導のできない聾児が存在する以上、手話・指文字の否定は教育そのものの否定につながり、教師が矛盾に陥ってしまうと考えた。「純粹に発音法の理論に立つならば、多くの聾児たちの教育は成り立たなくなり、失敗となってしまう。従って、失敗とならないためには、手話をとり入れなくてはならず、その実践は彼らの信条を大きく変えなくてはならないからである」⁽²¹⁾。であるから、手話を廃止するという純粹口話法の方向ではなく、併用法の方向へ進むとみたのである。

19世紀を見た限りでは、彼の予測はある程度当たっていた。しかしその後の歴史は、E. M. ガローデットの考えた通りには進まず反対の方向へ進むことになるのである。彼はそこまで見通すことはできなかった。

7. 考察

19世紀の前半手話による指導法が広まっていた中で、ドイツにおいて1840年代から、発音による指導方法が再び注目され始めていた。E. M. ガローデットが、ヨーロッパを視察した時期は、ヨーロ

ッパに広くその影響が出始めた頃であり、聾教育が指導法の上からみても、変わりつつある時期であった。このことは、彼の報告書からもはっきりうかがえる。

20世紀に生きるわれわれは、その後発音法を押し進める口話法の波が押し寄せ、やがて手話を徹底的に追放した純粹口話法の時代になったことを知っている。E. M. ガローデットは、時代が併用法へ向かうと考えていた。19世紀の後半から20世紀へと徐々に口話法へ突き進むその変化の見てきた時代であった。(1960年代の後半からアメリカを中心に、口話法からトータル・コミュニケーションの時代へはいった。変化のテンポは異なるが、20世紀後半の現代と比較し得る時代である。この時代は手話から口話法へ、そして現在は逆に手話が見直されているのである。)

E. M. ガローデットのハイニッケ論、ド・レベ論は、現在のトータル・コミュニケーションの立場からの純粹口話法に対する批判に一脈通ずるものがある。現代の心理学者ファース (H. G. Hurth, 1972)⁽²²⁾ は、その著「聾と学習」の中で、“言語は思考にとって不可欠なものではない”と述べ、また“音声言語があってもなくても、学業成績がよくても悪くても、聾者は知的人間であることを認めることが第一に必要なことである。”と述べている。現在は今までの純粹口話法が批判されている時代であり、E. M. ガローデットのこの後に続く時代は、手話・指文字が批判されていく時代であり、彼の意見は見事に捨て去られていった。そして彼の併用法の主張は、手話を少なくして発音の指導を強めていくことを提案した時代の流れに沿ったものとしての一般的解釈が残っていった。しかも手話も残した併用法という甚だ不徹底なものとして顧みられることはなかったものである。口話法の立場に立つ聾教育の歴史は、彼の手話に対する考え方をネグレクトした。また、E. M. ガローデットの教育方法の理念については、まったく注目されることもなく、併用法という名前だけが残し、その実践はやがて聾教育の表面から消え去っていくものとなっていった。実際は、アメリカの聾教育史において併用法は、重要な役割を持つてきたと筆者は考えている。口話法の時代の教育者たちの関心がひたすら発音指導と読話の指導に向いていたのであれば、当然歴史の見方もその意図に沿った見方が強く出てきたのも当然のことであった。

さて、E. M. ガローデットの考え方は、従来の手話・指文字の指導を中心にする考え方に立つもので、発音法をとり入れることによって手話をなくしていこうとするものでないことが明らかになった。それは、“発音の指導に不成功の生徒に対して、仕方なく必要悪として手話が用いられるのではない”ことでもあった。当時のヨーロッパにあっても、発音法を導入した学校が、宗教教育や日常生活では手話を承認していたのを見ても、手話に対してまだ積極的なよい評価を下していた状況がうかがえる。

最後に、E. M. ガローデットは、次のように言っている。何故すべての聾児に対して発音指導の試みを勧めたのか。文明の精神(時代精神)が、手話ではなく、聾啞者の発音を可能にするという方向に進んでいたことを知っていたからであろう。

「現代のような発展の時代にあつては、社会は単に本質的なもの (mere essentials) の達成だけでは満足してくれない。文明の精神は、絶対的な完全さが得られるまで進歩を要求する」⁽²³⁾

19世紀の後半は、彼をしてこのように言わせる時代でもあった。進歩観の時代はまだ続いていたのである。いやむしろ教育や科学技術に対する進歩の期待はより強くなっていたと言える。彼自身

が意識していなかったにも拘わらず、この彼の言葉の中に、“純粹口話法への方向”が潜んでいたとすることができる。

1890年アレクサンダーG.ベルが「聾啞へのスピーチ指導促進協会」(Association for the Promotion of Teaching Speech to the Deaf)を創設し、E. M. ガローデットとの対立の中で、20世紀に向けて口話法が普及していくことになる。E. M. ガローデットは、A. G. ベルが時代を代表するチャンピオンになったのとは対照的に、「聾啞者個人個人に何が最良なのかを考えた」⁽²⁴⁾人物として、今日再評価されねばならないと考えるものである。

(うへの・ますお 社会福祉学科)

注

- (1) Griffith, R., "Person with Hearing Loss", 1969, p.12.
- (2) 1817年4月15日 Connecticut Asylum for the Education and Instruction of Deaf and Dumb Person,の名称で、T. H. GallaudetとL. Clercを中心に、7名の生徒をもって始められた。
- (3) Asylum もしくはInstitution つまり養育院あるいは養護施設と呼ばれていた。クラーク聾啞院の設立運動に際しては、名称もschool(学校)にしたい、という希望があった。
- (4) 上野益雄:アメリカ聾教育における口話法の成立について、東京教育大学教育学部紀要, Vol. 22に詳しい。
- (5) ユダヤ人の子弟に対して始められたもので、クラーク聾啞院より3カ月早い3月に10名の生徒をもって正式に開かれた。
- (6) ビアード, C., ビアード, M., ビアード, W., 著 松本重治, 岸村金次郎, 本間長世訳『新版アメリカ合衆国史』, 岩波書店, 1964, P. 223,
- (7) 一番ヶ瀬康子『アメリカ社会福祉発達史』, 光生館, 1969, P.61.
- (8) 上野益雄「初期のアメリカ聾教育における手話の役割」中野善達編『手話の考察』, 福村出版, P.171.
- (9) デーヴィッド・B. バーク著, 紺野義継訳『ユニテリアン思想の歴史』アポロン社. 1978.
ミード, S. E. 著, 野村文子訳『アメリカの宗教』日本基督教団出版局 1978. フランクリン・H.リッテル著, 柳生望, 山形正男訳『アメリカ宗教の歴史的展開』ヨルダン社, 1974.
曾根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局, 1986..
柳生望『アメリカ・ピューリタンの研究』日本基督教団出版局, 1981.等参照.
- (10) バッツ, R. F., クレメンL. A., 著, 渡部晶, 久保田正三, 木下法也, 池田稔訳『アメリカ教育文化史』学芸図書, 1976, p.189.
- (11) 久保義三『民衆教育論』, 世界教育学選集, 明治図書, 1972, P.224.
- (12) ビアードC., 他, op. cit., p.240.
- (13) Gallaudet, E. M., "Report of the President on the System of Deaf-Mute Institutions Pursued in Europe," 1867, p.54.
- (14) 純粹口話法において、重複障害児の場合、やむおえず手話の使用を認めていた。併用法は口話法と区別がつかずあいまいになっていった。
- (15) Gallaudet, E. M., "The American System of Deaf-Mute Instruction, Its Incidental Defects and Their Remedies,

Proceedings of the National Conference of Principals", 1868, p.54.

上野益雄, アメリカ聾教育史における併用法(3), 筑波大学心身障害学系紀要, Vol.13, No.2, 1989, p.110.
参照.

(16) Gallaudet, E.M., 1867, op.cit., p.44.

(17) ibid., p.46.

(18) ibid., p.46.

(19) ibid., p.47.

(20) ibid., p.52.「岩の上に建てられた家」という表現は, 新約聖書マタイによる福音書 7 章24-27節.

(21) ibid., p.47.

(22) Furth, H. G., *Deafness and Learning*, Ch.9., pp.101-104参照.

(23) Gallaudet, E. M., op.cit., p.50.

(24) Winefield, R., "Never the twain shall meet-The communication debate", 1987, p.102.

Edward M. Gallaudet's View on the Deaf

Masuo Ueno

In 1867 Edward M. Gallaudet who was a president of the National College for the Deaf-mutes went to Europe for the purpose of the investigating the teaching methods of language for the deaf. He drew up a report on the state of deaf education in Europe. He made a proposal for the combined method of speech and sign.

What is the combined method proposed by Dr. Gallaudet?

What is the substructure of his combined method?

“One of his contents of his proposal is that instruction in artificial speech and lip-reading be entered upon as early a day as possible; that all pupils on our primary department be afforded opportunities of engaging in this, until it plainly appears that success is unlikely to crown their efforts.”

He evaluated that the best method was the one based mainly on sign, adding speech to a greater or less extent.

The philosophy underlining the manual method is historically opposed to that of articulation method.

(1) Dumbness is considered as an abnormal state of being.

The command of spoken language is absolutely essential to make the deaf-mutes normal.

(2) Dumbness is not regarded as an abnormal state. The competent channel of communication is approved

Dr. Gallaudet supported the latter view.

The real philosophy of Dr. Gallaudet, which recommended the speech, seems to be similar and close to the articulation method. However, that is not actually the case. He proposed the instruction of speech on the basis of the philosophy of the manual method.

Key Words: deaf, E. M. Gallaudet, combined method, lipreading, artificial speech.